○●　福井県会に　反原発議員登場とは　なりませんでした　が、　○●

原発を止めようという運動を着実に広げてゆきたい

山崎　たかとし

3月26・27日に、鯖江・越前の両市で長澤啓行さんの緊急講演会を開催しました。20年前の阪神大地震の直後に「福井の原発は大丈夫?」と題して勉強会を開いたことがあります。福井の原発が地震に襲われる日のことを想像する県民も多く、参加者で会場が埋め尽くされたものです。福島原発では危機的状況が続く中、私の神経は磨り減るばかりでしたが、20年前のことを思い出し、講演会を開催することにしました。

講演会のチラシを配り歩く中で、旧武生市の中堅どころの友人たちから『選挙区内には、原発の知識をもち、議会で議論を挑むことのできる候補がいない』『選挙区内は30キロ圏内。人々は貴方の脱原発の主張に耳を傾けるはず』と県議選に立候補することを強く勧められました。もんじゅの運転再開と新幹線の延伸を取り引きする県議しかいない議会の現状をかねがね憂いていた人たちです。20年前に、ロータリークラブの総会で私の原発の講演をお膳立てしてくれた同級生もその一人です。

選挙戦で私は、脱原発の主張一本にしぼり「原発依存の県政から脱却してポスト原発の地域振興策を進めるよう県に提言し、一日も早く原発を止めてゆく」と街頭で市民に訴えました。とはいえ、私が原発問題に取り組んできたことは、旧今立町では(30代以下を除き)知られてはいますが、大票田の旧武生市などでは私の存在はほとんど知られていません。それに、急な立候補のため準備に追われ、告示前の個々面接もできませんでした。かつて私が、市が備蓄していたヨウ素剤を撤廃した問題について議場で論じているとき、後ろから野次を飛ばしていた同級生の保守市議は、「山崎はオオカミ少年だと思っていたが、本当にオオカミが出てきたのだから、これからは反対せざるを得ない」と私の応援に回りました。また、若い人たちがネットで支持を広めてくれ、市民の反応も良く、すべりこみでいけるのではとの期待も生まれました。口コミによる浮動票の積み重ねに期待しましたが、残念ながら旧来型の地域ぐるみ(住民囲い込み)選挙を打ち破ることはできませんでした。

他方で、社会党時代には反原発で、民主党に移ってから原発容認となった現職は、とつぜん脱原発を言い出し、保守候補たちも「もんじゅの廃炉・敦賀原発増設とプルサーマルには反対する」と言い出しました。他の選挙区ではそういう現象は起こらなかったようですから、私が立候補した効果はあったのかもしれません。

ただ、4月20日付の福井新聞によれば、これからも原発は継続して運転した方が良いと敦賀市民の70%が考えているようですし、敦賀市長選では脱原発の姿勢を明確にする候補はおりません。県民意識も、「自然エネは割高、原発の電気は安い。資源のない日本に原発は不可欠。安全対策を徹底すべき」と、まだまだ福島は他人事です。ですから、先の県議たちが真剣に脱原発を唱えるようになるとは考えにくいのです。

なお、長澤さんの講演会、続いて4月2・3日には小林圭二さんの講演会も開きましたが、いずれも会場は立錐の余地も無いほどでした。私も、原発を止めようという世論を着実に広げてゆく運動をこれからもたゆまず続けたいと思います。甥と娘の二人が脱原発の活動をすすめなければと本気で考えはじめています。

――― 事故を小さく見せようとする国、電力、マスコミ報道の中 ―――

原発事故の深刻さを表明！
日本の原子力研究を担ってきた専門家たち

3月31日、①状況はかなり深刻である、②広範な放射能汚染の可能性を排除できない、③国内の知識・経験を総動員する必要があると、緊急事態に対処することを求める提言発表をしました。

事故後2週間後に発言するのは、事故の免罪符なのでしょうか。それとも責任を少しでも回避するための策なのでしょうか。**今まで安全ですとしか言ってこなかった人たちが、今回は深刻な事態であることを表明**しているのです。

福島原発事故についての緊急提言（抜粋）　　3月31日

原子力を先頭だって進めて来た者として今回の事故を極めて遺憾に思うと同時に国民に深く陳謝。

私達は、事故の推移を固唾を呑んで見守ってきた。しかし、事態は次々と悪化し、今日に至るも事故を終息させる見通しが得られていない状況である。既に、各原子炉や使用済燃料プールの燃料の多くは、破損あるいは溶融し、燃料内の膨大な放射性物質は、圧力容器や格納容器内に拡散・分布し、その一部は環境に放出され、現在も放出され続けている。

特に懸念されることは、圧力容器内で生成された大量の水素ガスの火災・爆発による格納容器の破壊などによる広範で深刻な放射能汚染の可能性を排除できないことである。

さらに、住民避難に対する対策、復帰も含めた放射線・放射能対策の検討も急ぐ必要がある。

福島原発事故は極めて深刻な状況にある。更なる大量の放射能放出があれば、広範な地域での生活が困難になることも予測され、既に国家的な事件というべき事態に直面している。

当面なすべきことは、冷却状況を安定させ、内部に蓄積されている大量の放射能を閉じ込めることであり、また、サイト内に漏出した放射能塵や高レベルの放射能水が環境に放散することを極力抑えることである。

青木 芳朗、石野 栞、木村 逸郎、齋藤 伸三、佐藤 一男、柴田 徳思、住田 健二、関本 博、田中 俊一、長瀧 重信、永宮 正治、成合 英樹、広瀬 崇子、松浦祥次郎、松原 純子、諸葛 宗男